

## IPM実践指標( ナス(施設) )

分類	管理項目	管理ポイント	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
予防	ほ場内、周辺の除草	病害虫の発生源となるので、雑草を除去する。			
	土壌消毒	薬剤または前作の収穫収量後にハウスを密閉して高温を利用して、土壌中及び資材の病原菌・害虫・雑草を防除する。			
	資材の消毒	使用した資材や支柱は残さを取り除き消毒する			
	抵抗性品種の利用	青枯病、半身萎凋病等の予防のため、その病害に抵抗性のある品種を利用する。			
	健全苗の定植	定植苗は、病害虫の発生・加害のない健全苗を使用する。			
	栽培管理	栽培基準に従って適切な密度で定植・管理して、軟弱徒長させない。摘葉して過繁茂を防ぐ。			
	排水対策・水管理	排水不良で病害の発生が助長されるため、排水対策を徹底する。また、灌水過多にならないように適正な水管理をおこなう。			
	肥培管理	施肥基準に準じた、適正な肥培管理を行う。			
	病害発生源の除去	病害虫などにより枯死した株を速やかに除去する。摘葉、摘果をハウス外に持ち出して適正に処理し、施設内の病害虫の発生源をなくす。			
	施設内の湿度管理	敷きわら、籾殻やポリマルチ等により施設内の湿度を適切に保つ。暖房機、循環扇の利用または敷きわらやポリマルチなどの被覆により施設内の湿度を適切に保つ。吸湿性フィルムを内張りに用いて、多湿にならないよう管理する。			
施設の蒸し込み	栽培終了後に施設の蒸し込みを実施し、施設内の害虫を死滅させる。				
判断	防除要否・タイミングの判断	病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や普及指導センター等が出す病害虫に関する情報を入手し、発生状況を確認する		
	気象情報の活用	気象情報を把握し、適切に防除を実施する。			
	トラップの設置	粘着トラップ、フェロモントラップ等で害虫の発生状況の把握する。			
	病害虫の発生状況の把握	定期的な園内を見回り、病害虫の発生状況を観察及び確認する。			

IPM実践指標( ナス(施設) )

分類	管理項目		管理ポイント	チェック欄			
				昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況	
防除	生物的防除	アザミウマ類 コナジラミ類	生物農薬等の使用	スワルスキーカブリダニ剤、タバコカスミカメ等の天敵資材を使用する。			
			生物農薬の使用	ポーベリアバシアーナ乳剤等の微生物剤を使用する			
		アブラムシ類	生物農薬の使用	コレマンアブラバチ剤等の天敵製剤を使用する。			
			生物農薬の使用	バーティシリウムレカニ水和剤等の微生物剤を使用する			
		ハダニ類	生物農薬の使用	ミヤコカブリダニ剤、チリカブリダニ剤等の天敵製剤を使用する。			
		チョウ目害虫類	生物農薬の使用	BT剤を使用する。			
		灰色かび病	生物農薬の使用	バチルスズブチリス水和剤等の微生物剤を使用する。			
	物理的防除	防虫ネット等の設置		外部からの虫の侵入を防ぐため、施設の出入口、天窓、側窓等に0.4mm目合いの防虫ネットを設置する。			
	化学的防除	農薬の使用全般		十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。			
		剤の選択	薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。				
			天敵に影響の少ない薬剤を選択する。				
			化学農薬に対する感受性の低下を抑制するため、物理的防除効果のある剤を組み入れる。				
		農薬飛散防止対策		農薬散布は、無風～弱風時に飛散が少ない散布器具を使用するなど、他の作物などに飛散しないように、適切な飛散防止策を講じる。			
散布後の処理		散布器具、タンク等の洗浄を十分行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。					
その他	作業日誌の記帳		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の名称、使用時期、使用量、散布方法等栽培管理状況を記録する。				
	研修会等への参加		県や農業協同組合が開催するIPM研修会等に参加し、情報収集に努める。				